



# 桑原の宿の原の、 西行法師の袈裟かけの松

むかしむかし、それはとおいむかしのこと。

桑原にまだ町割もなく、それでも五、六軒ぼちぼちと善光寺参りの旅人なぞ、留めていた頃のこと、都より偉い法師(実は西行法師)が、この地を通りかかったそう。

何でもむかしの事だから、真つ暗な夜になると色々な獣が蠢いて、獣道が宿の外れに沢山出来る程だった。

一番悪い「おちよぼ」と云うきつねは、人々を騙したり村の畑や人家まで入り込み悪戯三昧(いたづらごま)していて、村では大変困っていたそう。

桑原の宿場の外れに、それはそれは大きな松があつて、旅人が休んだり、次の宿へ行くときの目安として大切にされていた。

そんな時都から来られた西行法師が、丁度そこでお休みになられていた。

それを見つけた、きつねの「おちよぼ」は綺麗な女性に化けて近づいた、法師は日本中を布教されていた方なので、女性が純情な人でない！と直ぐに感じ知らん顔して澄まし込んでいた。

女の人はそれとも知らずに近づい

て西行法師の旅を労ったり、世間話を持ちかけて気を引く様上手に話しかけてきた。

色々の話の後、話が途切れる頃を見計らつて、法師は女に「私と歌比べをしませんか」と、さらりと云つた「私に貴方が勝つたら、都で流行

っているこの袈裟を上げましょう」と、金銀で華やかに刺繍してある袈裟を、松の小枝にかけた。

あたりの松の緑に映えて袈裟は、それはそれは美しく、「おちよぼ」は堪らなく欲しくなった。

西行法師のタイミング良さにつられてつい歌比べの返事をしてしまった女は、法師からどうぞと云つてしまった。

法師は、短冊に「桑原の宿の原、松の影より眺むれば、獣のかよう道ぞあきらか」と読まれた。

女は法師が私をきつねである事をもう知っていると悟り、自分の歌は読まずに、懐るより美しい、ほうしようの玉を出して、さめざめと自分のしてきた今迄の事を振り返り「これからは旅人を騙したり、近隣人々に迷惑をかけたりましたしません」と、

女はきつねの「おちよぼ」に帰って

懺悔した。

西行法師は、この「ほうしようの玉」は貴方が持っていたほうが似合うと云つて、受け取るうとしなかった。

それよりこの宿の松を誰云うとなく、西行の袈裟かけの松と呼ぶ様になった。

今は、もう松も無く「宿の原」と云う、大勢の人々の墓地になっている。

桑原伝説より  
堀内 崇

